
BHT ~ 隻眼の天使 ~

高橋 A 全

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BHT～隻眼の天使～

【Zコード】

Z9657Z

【作者名】

高橋A全

【あらすじ】

家族をうしなつて行き場をなくした少女は、資産家の令嬢のご厚意で、メイドとして働かせてもらえることになった。忙しくも心休まる日々が続いたが、それもつかの間のこと、大恩あるお嬢さんに危機が迫ると知らされる。なんとかしようと困惑する少女の前に、凄腕のメイドがやってきて……。

むらむらしているBと、よたよたしているH-Tが繰り広げる、またたりとしたメイド系コメディー。

プロローグ（前書き）

<注意喚起>

「コメティイ」要素は割と弱めだと思われます。
ですが、ジャンル分けで他に該当するものはありません。
結果として「コメティイ」で投稿しております。
お読みになる前に、その点を「了承ください」。

プロローグ

大好きだった、お父さんが、死んだ。

突然あらわれたのは、黒ずくめの男のひとたち。

「遺体の確認をしてもらいたい」

それが、彼らの言い分だつた。その口調はきわめて事務的で、感情というものを感じさせることができなかつた。だから、わたしも何も感じることはなかつた。

これは夢か何かで、現実ではない、わたしはそんな風にしか感じていなかつた。

彼らに連れられて靈安室へと向かう最中も、わたしあはずつとふわふわとした非現実的な感覚に支配されていた。

暗い部屋。

寒い部屋。

狭い部屋。

白い布がめくられて、白い肉体があらわになる。

見慣れない顔。まるで違う顔。

お父さんはこんな顔をしていない。そう思つたから、別人だ、としか思えなかつた。

そのひとのほほに、触れてみた。

ぐにやぐにやとした、奇妙な感触。やつぱりちがうひとだ、とわたしは感じていた。

「これなら大丈夫じやないか」

男のひとがつぶやく。

わたしに聞こえないようにして、ひそひそと会話がかわされた後で、別の男のひとが、ささやくように言つた。

「写真を見ますか？ 無理に、とは言いませんが」

口調とは裏腹に、その表情と声は、強制的だつたように記憶して

いる。

差し出される写真に、目を落とした。

上方からぶら下がった縄。その縄が巻きついていた首。だらりと垂れ下がった体。

わたしの視線が、遺体の顔へと固定される。突き出そうになつている眼球。実際に突き出されている舌。紫色になつてている顔の皮膚。それは、今まで見た二エンゲンの顔の中で、いちばんひどいものだつたけれども、わたしには分かつた。わたしには分かつてしまつた。写真にうつる、天井からぶら下がつた物体が、まさにお父さんである、と認識された瞬間、わたしの中で何かがはじけた。

壊れて、砕けて、爆発した。

視界がぐにやりと歪んで、とめどなく何かがからだの内側からあふれだしてきた。黒ずくめの男たちがしきりに何かを口にしていたが、わたしには何も聞こえなかつた。まるで超大型の台風のような、すさまじいまでの何かがわたしの中で荒れ狂つていた。

大好きだったお父さん、優しかつたお父さん。いつもわたしの味方だったお父さん。

お父さんの笑顔が、永遠に続くかと思われるほど何回も、繰り返しわたしの目の裏に、スライド写真のように映し出された。気がついたとき、わたしはソファーの上に寝かされていた。

「やっぱり見せない方がよかつたかな」

男のひとたちの会話がぼそぼそと聞こえてくる。はつきりと覚えているのは、そこまでだつた。

この後のわたしの記憶は途切れ途切れになつていて、まるでテレビのチャンネルを頻繁に変えたときのように、飛び飛びになつてゐる。何度も耳にしたのは、

「『親戚は？』

という言葉だつた。わたしは首を横に振ることしかできなかつた。お父さんが勤めていた会社の方でも、親族の連絡先は知らなかつたらしい。後になってから知つたことだけど、お父さんは結婚する

ときに親族と大喧嘩をしてしまい、親戚一同から絶縁されていたようなのだ。

お母さんはすでに亡く、ただひとりの家族であつたお父さんが自殺してしまつたいま、わたしはひとりきりだつた。ときおり、中学校の担任の男の先生が、困つたような顔で付き添つてくれているだけだつた。

お父さんのお葬式のこととか、お墓のこととか、そんなことを聞かれても、わたしには分からなかつた。まして、お父さんが管理していたお金のことなんて何も知らなかつた。

ゾウワトイとか、オウリヨウとか、そんなものは、わたしは理解できなかつた。

カタクソウサクと一方的に言われて、自宅は乱暴なひとたちによつて踏み荒らされた。

「お父さんは、そんな悪いことはしていません」

そうつぶやいて、わたしはただうつむくことしかできなかつた。大家さんは、「今すぐにでも出ていってほしい」と、言つた。

わたしが首を振ると、「さすがに犯罪者の娘は恥知らずだ」と、怒鳴られた。

どうしたらしいのか分からなかつた。

大家さんだけではなく、マスクミミだと名乗る人たちも、家にやつてきた。電話や玄関のベルが鳴り続けて、わたしはおふとんの中ですっと震えていた。

お父さんの遺品をかたづけよつとしても、思い出すのが怖くてさわれなかつた。

わたしは、家の外へと逃げた。明日のことはもちろん、今日のこともすら考えることができないままに、わたしは公園のブランコに、ひとり座り込んでいた。

とにかく、わたしはお父さんに会いたかつた。

泣きそうになつて、何度もそれを我慢した。

『わたしは泣かない』

それは、お母さんが死んだときに、お父さんと約束したことだつた。

お父さんが死んでしまった今となつては、約束だけでも守らなければならなかつた。

じぼれそうになる涙と戦い続けるうちに、あたりは暗くなり始めていた。どうすることもできないままに、わたしが顔をあげたときのこと。

音もなく、一台の真っ赤な車が公園の入り口に止まつた。
大きくて、すゞく高そうな車だつた。スーツ姿に制帽をかぶり、
丸メガネをかけた若い女性が、運転席から降りてくると、後部座席
のドアをうやうやしく開けた。

そのときのことを、わたしは今でもはつきりと覚えている。
運転手の女性が差し出した手に、みずからの白い手を重ねた人物
が、ゆっくりと落ち着いた動作で大地に降り立つた。
舞い降りた、といつた方が正しかつたかもしれない。

車から現れたのは、ひとりの女のひと。

流れるような美しい長い髪。すらりとした長身。抜けるように白
いその肌。一流の彫刻家がつくりあげたかのような、完璧な顔立ち。
左目に、なぜか白い眼帯をつけていたが、それすらも神々しい装飾
品にしか見えなかつた。

わたしの目は、吸い寄せられるようにその女のひとに釘付けにな
つた。

わたしは、天使に会つた。

その女のひとの背中に、白い羽が生えていないのがとても不思議
だつた。

その天使さまがわたしの方へと、ゆっくりと近づいてくる。
心臓が、ばくばくと高鳴るのがわかつた。呆然と、いや陶然とし
て眺めるだけのわたしの前で、天使さまが足を止めた。レースの手

袋に包まれた手が、わたしに差し出される。

「さあ、いらっしゃい」

言われるがまま、わたしは、つやつやしく天使さまの手をとった。

「おーい雪ん子、どうだい？　だいぶ、慣れてきたんじゃないのか？」

わたしは、背後から声をかけられて振り返った。声の主を確認すると、目線を上方に向ける。そのひと、清水拭乃さんは、わたしよりも頭ひとつ以上も背が高いからだ。

「えと、そう、ですね。慣れてきた感じはします、よ？　でも、まだ皆さんに迷惑をかけてばかり、ですけど……」すこし考えたあとで、正直に答える。

「いや、そんなことはないぜ。けっこつ助かってるよ」わたしと同じメイド服を着ている拭乃さんは、手にしていたモップの柄をくるくると手の中で回すと、ニッ、という感じで笑顔を見せた。「たしか……そろそろ三週間になるんだっけか？」

「えと、そうです。ここにきて一ヶ月になりますから」わたしは両手の指を折った。

「数えるのが、雪ん子らしいぜ」

拭乃さんは、けらけらと笑つた。その笑顔は、長身や短髪とあいまって、ボーグッシュな印象を強く受ける。とってもカッコいい。もし、わたしが通う中学校に在籍していたら、むしろ女の子からのラブレターをいっぱいもらひそうな、そんな感じの女性だ。

その拭乃さんが、いじわるそつなのに、不思議と魅力的な笑顔で言つ。

「そうだ、あと十日したら、一ヶ月記念、つてことで、みんなでお祝いでもするか？」

「え、え……そ、そんなのいりませんよお」

顔が、すこし赤くなるのがわかつた。拭乃さんはわたしのことをからかっているのだ。それくらいのことはわかる。

わたしは「三袋の口を結びながら、照れかくしのために笑つて訊

いた。

「つぎ、何をしましょう、か？」

拭乃さんは、もう一度モップをくるくると回した。「そりだなあ、掃除はもういいから、菜花を手伝ってくれるか？」

「はい、わかりました」わたしは、ペコリと頭をさげた。

わたしが、ここのお屋敷にお世話になるようになつてから、そろそろ三週間になる。

天使のお嬢さまから『自分のメイドになつてほしい』と言われ、はじめはただビックリした。そもそも、あまりにも唐突なお話であつたし、くわえて、メイドさんなるものが、どんなものなのか、わたしにはよくわからなかつたからだ。

それでも、何しろわたしには行くあでがなかつたし、生活のあてもなかつたから、とにかく話を聞くだけでもよいかな、と思つてお屋敷にやつてきたのだった。

そこで、いきなりメイド服に着替えさせられてしまった。

わたしがおろおろしているあいだに、『いま』まとることは、すべて処理されたみたいだつた。家にあつたはずの、わたしの私物とお父さんの遺品は、いつの間にやらお屋敷に運び込まれていたし、賃貸物件だつたおうちの退去手続きも終わつていたのだ。

呆然としていた時間が過ぎたあとで、わたしは冷静さを取り戻した、つもうだつた。

いくらなんでもさすがにこれは、と思って、あわてて部屋から廊下へと出たところで、天使のお嬢さまに出くわした。

「これから、よろしくお願ひね」

極上の、天使さまの微笑みが、まさに目の前にあつた。

気がついたとき、わたしは自然な動作でうなずいてしまつっていた。

そのあと、冷泉添華さん このひとはお嬢さまの秘書だと いう、黒っぽい色あいのスースを着た、クールな感じの女のひとが、別室で色々と説明してくれた。

この大内家は、かなりの資産家であること。

大内家が所有している会社も、いつぱいあること。

わたしのお父さんは、そんな会社のひとつで働いていたこと。

お父さんと、天使のお嬢さまには、わずかだが面識があったこと。
何かあつたとき、娘の小雪のことをお願いします、とお父さんから頼まれていたこと。

「幸いにも、夏休みに入つたばかりです。さまざまなことが落ち着くまで、このお屋敷にいた方が良いと思いますが」

添華さんの口調は沈着で、説明は的確だつた。とてもたくさんの情報を、頭の中で整理するのにすこし時間がかかつてしまつたけれども、最後にわたしは同意した。

「とりあえず、夏休みが終わるまで、お世話になります」

そう言つて、わたしは頭を深くさげた。

そのとき、『夏休みになつたら、一緒にディズニーランドに行こう』というお父さんとの約束が、永遠にお流れになつたことを、わたくしは思い出していた。

お父さんが死んだ、といつゝことを、わたしはあらためて実感していた。

涙をこぼれるのに、ちょっとぴり努力が必要だつた。

『菜花を手伝ってくれるか?』
と、清水拭乃さんに言われて、わたしが向かつた先はお台所だつた。

鍋島菜花さんは、お屋敷のお料理全般を担当しているメイドさんである。

まだ二十歳かそこらなのに、和食・洋食・中華にデザートと、ひとりでなんでも作れてしまった名コックさんなのだ。

菜花さんを手伝つところじとせ、お料理を手伝つところじである。菜花さんの腕前を近くで見られるので、わたしにとつても色々と勉強になることが多いし、何よりわたしもお料理が好きだから、お手伝いをするのが一番好きだつた。

「菜花さん、失礼します、よ?」わたしがペロリと頭をさげる。
ふたつのおさげを揺らして、菜花さんが振り向いた。「あ、こむちゃん、こりっしゃーい」

「あの、拭乃さんに言われて、お手伝いを」

「あら、ありがとうね」菜花さんが、にっこりと微笑んだあと、ふちの太いメガネの奥の両眼を天井に向けて、すこし考え込んだ。「うーんと、じゃあ、そこのおじやがの皮を、しゅるしゅるとむいてくれる?」

「はい、わかりました」

わたしは、水洗いされてざるに載つていたじやがいもを取りあげると、用意されていたピーラーで皮をむいていった。結構な量のじやがいもなので、丁寧かつ手早く作業しなければならない。

量が多いのには、理由がある。

いま、このお屋敷には、わたしたちメイドさんを含めて八人がいるのだ。お嬢さまのお食事は、菜花さんが最初から最後まで腕によりをかけるので別格としても、まかないだけでも七人分つくらない

といけない。つまり、わたしの皿の前にあるのは、のじる七人分のじゃがいもとなる。

ピーラーで大まかに皮をむくと、わたしは包丁に持ちかえた。刃の角のところを使い、芽の部分を取り除いていく。こじを丁寧にやらないと、おいもの大きさがどんどん小さくなってしまうので、わたしはすこし緊張した。

菜花さんがにじりと笑つた。「やつぱつ」おじちゃんは上手ね。たすかるわ」

「え、え……そ、そんなことないです、よ?」おじやぴり顔が赤くなる。

「でもねえ、前にふあぢゃんに手伝つてもらつたときは、おじやが立方体になつてたわ」

「拭乃さん、お料理苦手なんです、か?　お掃除はあんなに得意なのに」

「苦手といつか、あまり好きじゃないみたいなの。清掃員じゃないでメイドなんだから、仕事に好き嫌いはダメよ、って言つてはいるんだけどね」

「はあ、なるほど」そう心じながら、わたしはメイドさんにつっこえていた。

「お屋敷にくるひとたちが、メイドといつ呼び方をしてくるけど、実際のところ、ふつうの家事手伝こと変わらないのかな、わたしは感じていた。しいて言えば、服装がメイド服といつだけのことである。

わたしは父子家庭で育つたけど、お父さんはお世辞にも家事が得意とは言えなかつた。わたしは小児科から、お母さんの代わりに家事全般をやつていたので、得意とはいえないにせよ、ほとんどこの家事には慣れていった。

だから、菜花さんが言つたことは、正しいのだ、とわたしが思つた。

わたしなんかでさえ、ひとつおりはそれなりにできる。だから、

家事というのは才能の有無はあまり関係なくて、慣れているかどうかが大きいのだと思えた。菜花さんの『好き嫌いはダメ』というのは、たぶんそういう意味なのだ、と思つ。

じやがいもの皮むきが終わると、今度はにんじんを手に取つた。同じようにペーラーで皮をむく作業に専念する。あっちのボールに玉ねぎがあるのを見ると、どうやら今夜のまかないはカレーライスではないか、とわたしは判断した。

すると、お嬢さまのお夕食はポトフかな、とわたしは想像した。お嬢さまがカレーということはあり得ないからだ。別に、カレーがお嫌いということではない。刺激の強いものは食べとはいへないらしいのだ。詳しい理由は知らない。

詳しい理由は、知つてはいけない。

『お嬢さまのプライベートに関しては、あまり訊いてはいけない』
お屋敷の中には、そういう空気が漂つっている。

そのことは、ここに来てまもないわたしにも、わかつていた。そういう微妙な空気を読み取る力は、お父さんの事件があつてから、だいぶん上達したのではないか、とわたしは感じていた。原因といい経緯といい、結果に自信をもつてよいことなのかどうか、わからないけれども。

にんじんの皮をむきおわつて、わたしは玉ねぎをチラリと見た。たぶんつぎは、あれをきざまないといけないのだと思つたが、正直なところ田が痛くなるのはつらい。こうこうときは、メガネをかけている菜花さんが、すこしうらやましくなる。

そんなとき、台所の方から、ペーペーという機械音が聞こえてきた。

「あ、お洗濯が終わつたみたいだから、るるちゃんのところに行つてあげて」

「はい、わかりました」

内心で胸をなでおろし、玉ねぎにバイバイをすると、わたしはペーペーと頭をさげた。

わたしがサンダルに履きかえて、中庭に出たところで、洗濯かごを両手で抱えている、河野流瑠ちゃんと出くわした。

「あ、流瑠ちゃん、お手伝いにきたよ」

「おっ、サンキュー、ゆつきー。じょじょじょま、脱水がおわったところだよん」

流瑠ちゃんはウインクしてみせると、ショートカットの髪を揺らし、ニカツと笑った。流瑠ちゃんはいつも元気いっぱいで、一緒にいると、わたしも元気になるように思えて、ちょっとびり嬉しくなる。流瑠ちゃんは、わたしと年がひとつしか変わらない。

つまり、中学三年生のはずで、そんな若さでこのお屋敷に住み込みで働いている。何があったのか、わたしはもちろん訊かなかつたし、流瑠ちゃんの方も、わたしに何があつたのか、たずねることはなかつた。

だけど、なんとなくだけ、心の奥底の方では通じるものがあるのではないか、とわたしは感じている（一方的にだけ）。流瑠ちゃんの方が年上だし、メイドさんとしても先輩だけど、『ちゃん』付けで呼ぶことを許してくれたし、わたしもそれに甘えていた。

「よつ、こら、せつと」

「よこしょ、よつと」

ふたりで掛け声を合わせて、お洗濯ものを運んでいく。行く先是二階にある、乾燥専用のお部屋だった。

わたしはこのお屋敷にくるまで知らなかつたのだけど、こうこう高級住宅街では、お洗濯ものを外に干してはいけない、のだそうである。

景観上の問題らしいのだけど、お洗濯ものをひたまの下で干せないのは、何となく残念になる。さすがに、シーツとかタオルとかは乾燥器にかけるけど、いまいちまとしたものや、痛みやすいものは

室内に陰干しある」となる。お部屋を暖気して、換気する」という乾かすのだ。

じつは、このお洗濯と乾燥が、かなりの重労働である。お掃除やお料理टベリべると、体力の消耗がはげしい。気がついたときには、ふつふつと汗をかくことになる。それでもこれが終われば、ちゅうとひと休みできるのだ。

お掃除、お料理、お洗濯。

いつもやつて、色々と体を動かしてみると、思つてみると時間がたつのが早い。

この一ヶ月ほどは、わたしの生活はこんな感じだ。お屋敷にいるメイドわんたちの、誰かしらのお仕事をお手伝いしているのだ。もちろん、お手伝いできないものもある。

たとえば、メイドの安国寺智恵さん。このひとは事務処理を担当していて、しかもお嬢さまの家庭教師的な立場を兼任している。なので、智恵さんではなくて、智恵先生とお呼びすることが多いのだけど、このひとのお仕事はお手伝いできない。事務として扱っている書類には、ときとしてマル秘な内容のものも含まれるからだ。むしろ逆に、

『安国寺さんのお部屋には、勝手にはいらないよう』

と、秘書の冷泉添華さんからきびしく言われているくらいだ。部屋の前に出している、シロレッダーされた書類の「ミ」を片付けるくらいには、許されていいけど。

あとは、丸田輪わんのお仕事も、わたしではちょっとお手伝いはできない。そもそも、輪さんはメイドさんではなくて、運転手さんである。あのとき公園に止まつた、真っ赤な高級車（お嬢さまの専用車だー）を運転するのが、まさに輪さんの仕事なのだ。

しかも運転するだけではなくて、車の整備も自分でやってくる。さらに整備できるのは車だけではなく、機械全般におよぶ。おつきなどころでは電動式の門扉とか、業務用だと思われる大きな冷蔵庫や洗濯機など。ひとつちやなどころではパソコンやミシンはもちろ

ん、腕時計の修理までなんでも「やれなのだ。

女の子で、しかもまだ十代なのに、輪さんは機械にめっぽう強い。自慢ではないけど、わたしなんかは、ビデオの予約録画の操作にも自信がない。機械はダメ。だから、輪さんのお仕事はお手伝いできないのだ。なんか、わたしが触ると、機械が色々と壊れてしまいうな気さえするし。

あとは言つまでもないけど、秘書をされている添華さんのお手伝いなんかは、とんでもないことなので、とても無理なお話だつた。だから、わたしができるお手伝いは、次のみつづつ。

清水拭乃さんのお掃除。鍋島菜花さんのお料理、河野流瑠ちゃんのお洗濯。

たつたそれだけのことだつたけど、みなさんのお仕事をお手伝いしていると、けつこう忙しい。なので、余計なことを考えずに済むのが良い。

心が苦しいときは、くとくとなるまで体を動かしてしまえば、すこしは楽になる。

これは、このお屋敷に来てから学んだことだつた。

すくなくとも、何も考えずに、べつすりと眠ることができる。

それが、その場しのぎの逃げにすぎないとわかつていても、いまのわたしにとっては、とても大事なことであるかのように、思えるのだった。

それから、じばりくたつてからの「」。

鍋島菜花さんが、やかんを火にかけて言った。「じゃあ、すこし休憩にしましょうか」

「輪さんもお呼びします、か?」わたしは、拭き掃除の手を止めて訊いた。

あいかわらず、モップをぐるぐる回している清水拭乃さんが応じる。

「ああ、頼むぜ」

「あ、じゃあ、わたしが呼んできます、ね」わたしはふきんを流しのそばにおくと、駐車場の方へと足をむける。

菜花さんが休憩を提案した、ということなんだと、最近わかつてきた。さまたちが休憩をとった、ということなんだと、最近わかつてきた。菜花さんがお嬢さまのお部屋にお茶を運んだあとで、わたしたちもお茶をいただく、という流れになつてこる。つまり、お嬢さまとわたしたちが同時にお休みを取るわけで、そういうことで、わたしたちが休んでいる間に、急に呼びつけられてお仕事を任される事態が起つことにくなるのだ。

そういうのは、メイドさんとしての知恵なのかな、と思つ。菜花さんは、高校を卒業してからこのお仕事についたとのことなので、まだ一年かそこらしかたつていなこと思つけれども、このあたりの気の使い方はすくく上手だと想つ。きっと、もともとそういう心配りができるひとなのだろう。

さて、駐車場についたといひで、わたしは周囲を見渡して、丸田輪さんの姿を探した。

いつもだつたらこのあたりで、お嬢さま専用の真つ赤な高級車を、整備しているはずなのだけど……。

「あれ、れ?」わたしはびっくりして、思わず声をあげた。手に付いた油汚れを拭き取りながら、輪さんが姿をあらわす。「

「おや、ゆきひやん、ビッグしたスか？」

「あ、えと、輪さん、いま、お茶が入るので、お呼びしようかと思つたんですけど……」

わたしは、あとに続く言葉を飲み込んだ。

前にも言つたけど、お嬢さまに關することは、訊いてはいけないことになっている。

くわえて、わたし自身がただの使用人、という立場である以上は、お嬢さまとの関係の有無にかかわらず、あまり興味本位で余計な質問をしないように、そんなスタンスでいるように、と冷泉添華さんや拭乃さんから強い口調で教わっていた。

わたしは、そのお話は当然のことだと思つた。

もちろん、お世話になつてゐる身だ、といふこともあるし、このお屋敷ではいちばんの新米だ、といふこともあるけど、それら以上に理解できる部分もある。

といふのは、わたし自身が、逆の立場といつもの経験していたからだ。

お父さんの事件があつて、マスクのひとたちが、『知る権利』なるものをふりかざし、あらゆる意味で一方的な質問を、わたしに嫌といふほどあびせかけてきた。

興味本位の余計な質問といふものが、どれほどひとを傷つけるのか、わたしはわかつてゐるつもりだった。

だから今だつて、のどまで出かけた言葉を、じっくりしてがまんした。

どんなに知りたいからといって、簡単に訊いてよい、といふものではないのだ。

そんなわたしの内心を、輪さんは表情から読み取ったのかもしない。トレードマークになつてゐる丸メガネの位置を直すと、輪さんの方から話題をふつてくれた。

「お嬢さまの専用車が、いつの間にか一台になつてゐるから、ビックリしたスか？」

「え、え……まあ……そ、そんなところです」

顔のわりに大きな丸メガネの奥で、輪さんの目が笑っていた。「そんなにおつかなびっくりでなくても良いですよ、別に秘密つていうわけじゃないスから」

「よかつたです、よ? それを聞いて、とっても安心しました」

「で、どうスか? ゆきちゃん」

「どう、とは?」

「この一台、同じものに見えるスか?」

一瞬、輪さんの質問の意味がよく分からなかつた。けれども、わたしはちよびり考えたあとで、一台の真っ赤な高級車を見比べて、正直に答えた。

「そう、ですね。ナンバープレート以外、同じよう見えます、よ?」

「よし、それならオッケースな。じゃあ、お茶をいただきにいくスね」

わたしの頭には、まだハテナマークが点灯していただけれども、輪さんの方がすぐに話題を変えてしまつた。

「ところで、洗濯機の調子はどうスか?」

「あ、それなら、流瑠ちゃんが調子良いつて言つてましたよ。すごく喜んでました」

「そつスか。でもあれ、年代物スから。私がしたのは応急処置スから、そのうちまた調子悪くなるかもスね。早めに業者さんを呼んだ方が良いかもスよ」

「年代物ということは、かなり古いものなんです、か?」

「お嬢さまが生まれた年に買ったみたいスな」

「それは……」と言いかけて、わたしは言葉につまつた。ここで古いとか年代物とか言つと、間違いなくお嬢さまに非礼であるにちがいがないからだ。

そんな、どきどきしているわたしの様子を見て、輪さんは一やりと笑つた。

しばしの間、みんなで休憩しながら、菜花さんが淹れてくれたお茶をいただいた。

『休憩をしつかりとることも、大事な仕事のひとつです』

このお屋敷にきたとき、秘書の冷泉添華さんから、わたしはそう教わった。最初は意味がよく分からなかつたけれども、今なら何となく分かる。

つまり、メイドさんには基本的にお休みがない、ということなのだ。

いちおひ、労働基準法にもどづいて、週に一度はお休みが入ることになつてゐる。でも型どおりにお休みが取れないのは、どうみても明らかなのだ。

たとえば、料理を担当している鍋島菜花さんのお休みてしまえば、お料理を作る人がいなくなつてしまつ。もちろん、わたしを含めた他の四人は、まったく料理ができるわけではない。それでも、まかないならば何とかなつても、お嬢さまのお食事だけは、もうどうにもならない。外で作つてもらつたものを持つてくるか、あるいは料理人さんに来てもらつて、作つてもらつうことになる。

今のところは、お嬢さまが気をつかつて、週に一度は外食をしてくださつてるので、なんとか菜花さんはお休みが取れている状況なのだ。

これは運転手の丸田輪さんにも言えることで、お嬢さまの方から、『お出かけしない日』というのを決めていただいて、そこに休みを入れてゐる。

お屋敷はお庭がとても広いから、掃除担当の清水拭乃さんにつて、ほとんど余裕はない。洗濯担当の河野流瑠ちゃんはすこし余裕があるけど、そもそも彼女はまだわたしと同じ中学生だし、三年生だから受験も控えているはずなのだ。新学期になれば、色々と手

一杯になるにちがいなかつた。

だからこそ、休憩なのだと思つ。もともとギリギリの状況なのだから、誰かが体調を崩すと大変なことになつてしまつのだ。体調管理は、万全でなくてはいけない。

「最悪の場合はさ、まあ応援を呼べない」ともないと思つけどさ」
拭乃さんがお茶をすすりながら言つた。「このお屋敷のしきたりをよく知らないやつが来てもさ、つまといかないだろ？ 結果的に、お嬢さまに迷惑はかけることは、したくないぜ」

わたしはうなずいて、カップを口に当てた。

さすがに大内家はお金持ちで、使用人が飲む紅茶もおいしいものを使つてゐる。どこがどう、と詳しく訊かれると困つてしまつけど、おいしいのだけは、わたしでもわかる。それくらいのはつきりとしたちがいが、そこにはある。

不意に、使用人用の食堂の壁が、「コソコソ」と軽く叩かれた。みんなの視線が集まる先に五人目のメイド服の女性があらわれる。

「あらあら、みなさんここに居たのね」

「あ、智恵先生。なにか用です、か？」わたしは、ぴょこんと立ち上がつた。

そんなわたしの様子を見て、安国寺智恵先生が、おつとりと笑つた。「そうじゃないわ。わたくしもお茶をいただこうかしら、と思つてここにきましたのよ」

「え？ でも、さきほど安国寺先生の分も含めて、お嬢さまのところへ三人分をお持ちしましたよね？ ……もしかして、お茶に何か問題でもありましたか？」菜花さんが、すこしだけ目をまくるくして、おさげを揺らしながら訊いた。

「うん、そうじゃないわ」智恵先生が、もう一度笑つた。「どうやら、おふたりだけでお話しされたいことがあるみたいで、あたくしは席を外してきましたの。それで、お茶をいただきそこねてしまつて」

「そうですか、それならすぐご用意しますね」菜花さんが、ホッと

した顔になる。

わたしも手伝ひ、むつひとり分のお茶を用意すると、智恵先生に渡した。

智恵先生は、みたびおひとつと笑った。「あらがとく、小雪さん」智恵先生は、じりじりくるメイドさんの中では、こちばんの古株になるらしい。

古株、といつても、まだ二十代半ばのはずだった。お嬢さまが外出される際には、当然のように添華さんもおともをするので、おふたりが不在のときには、智恵先生がメイド長のようなかたちで、ご指示を出されることになる。そんな立場のひとだ。

そう言えば、わざと『小雪さん』と呼ばれて思い出したけど、このお屋敷のひとたちは、わたしのことを呼びたいように呼ぶ。

拭乃さんが『雪ん子』で、菜花さんが『こゆちゃん』、流瑠さんが『ゆつやー』となる。ついで輪わんが『ゆきりやん』で、智恵先生が『小雪さん』になる。

はじめのうちはかなり戸惑つたけど、慣れてくると逆に楽になった。名前を呼ばれたとき、誰に呼ばれたのかすぐに判別できるからだ。

ちなみに、お嬢さまと添華さんは『陶さん』と苗字でお呼びになるのだが、このふたりに直接お呼びいただくような機会はほとんどない。幸いなことに、呼ばれてしまうようなことは（まだ）何もしてかしてはいなかった。

おいしそお茶と、おいしそお茶菓子。

しばらくの間、六人が集まつた食堂で、歓談が続いた。

ゆるゆるとした、暖かくておだやかな時間が流れしていく。ここにきて良かつたかもしれない、とわたしは心から感じていた。ティー・ポットが空になつたところで、みんなが仕事に戻つていく。いつもと変わらない日常、このときのわたしは、そんな風に考えていた。

風雲急を告げたのは、太陽がいちばん高くなつた頃だつた。お庭をせつせと掃いていたわたしは、突然、清水拭乃さんにつかまつた。

「雪ん子、いそいで菜花の手伝いをしてくれ」

「あ、そろそろお昼」はんですもんね」

「そんなことじやねえよ！」

こんなに険しい表情の拭乃さんを見るのは初めてだつたので、わたくしは思わず固まつてしまつた。返事をしようとしたが、うまく声が出ない。

そんなわたしを見て、拭乃さんがバリバリと頭をかいた。「……大声出して悪かつたな。だけどな、ちつとばかしマズイことになつたんだ」

「え、え……や、菜花さんが倒れてしまつたと、か？」

「菜花には悪いが、その方がまだ気が楽だぜ。あのな、雪ん子、よく聞けよ。」主人さまが急に来ることになつたんだ」

「……？　『』しゅじんさま』？」

「お嬢さまの、お父上のことだよ」

お嬢さまのお父さんについては、ここにお世話になるとき元気、秘書の冷泉添華さんから最低限のこと教えてもらつていた。

大内義貴。

たつた一代で財をなしどげた、大内コンツェルンの総帥。

とてもお忙しい方でもあるし、お嬢さままでさえお会いするときは『本邸』の方へ出向かれるので、まあお会いする機会はないでしょうが、というのが、添華さんの説明だつたと記憶している。わたしは我慢できなくなつて、拭乃さんに訊いた。

「あの、怖いひとなんです、か？」

「あれは怖いなんてもんじやねえな。覚悟しといた方が良いぜ」

そう言われてお尻をたたかれたわたしは、小走りにお台所に向かつた。そこにいた、鍋島菜花さんの顔もすこし緊張している。

「来客用の、いちばん高いティーカップを出したいの。戸棚の奥にあるから、手伝って。ゆっくりで良いから、絶対に壊さないようにな」

わたしは返事をすると、菜花さんを手伝つた。

戸棚のガラス戸にうつる自分の顔も、いつの間にかとても堅苦しいものになつていて、まるで別人のようになつているのがわかつた。ふたりで何とか無事に作業を済ませたあたりで、廊下の方から、一種類の靴音が聞こえてきた。片方は音が高いので、冷泉添華さんのヒールのものだとわかる。

その添華さんが、お台所の入口までやつてくると、腕組みをして中を一瞥した。「鍋島さんと、陶さんのふたりだけ?」

「はい、そうです」菜花さんが応じる。

添華さんは仮面のような表情で続けた。「河野さんは? 見てな

い?」

「申し訳ありません、わかりかねます」菜花さんが、軽く頭をさげる。

添華さんの鋭い視線が、わたしの方に向けられた。「陶さんは、ご主人さまにお会いするのは、はじめてですね?」「え、え……そ、そうですけど」

おりおりしているわたしに構わず、添華さんは隣にいる智恵先生の方をむいた。「河野さんも、おそらく、はじめてですね?」

「そう思いますわ。ご主人さまがお見えになるのは、一年ぶりですから。外でお会いしていない限り、はじめてになりますわね。……流瑠さんのこと、探してきましょうかしら?」

緊張しているが、柔らかさを残している声で智恵先生が応じる。「お願いするわ」

添華さんが首肯すると、左手首の内側にある時計を見た。

「それから陶さんは、五分後に私の部屋にきてください。ご主人さ

まへの」応対の手順やお作法に関して、話をします

「あ、あ……は、はい、わかりました」

廊下に向かいかけた添華さんが立ちどまり、首だけをこちらに向けた。

「それから先に言つておきますが、ご主人さまの前で、そのような返事をしないように。はつきりしない態度を、ご主人さまは大変に嫌つておりますので」

「ごくりと唾を飲み込んだわたしの耳に、遠ざかるヒールの音だけが聞こえていた。

そして、そのときがやつてきた。

あとから丸田輪さんに聞いた話では、真っ黒な超高级車が三台も門の前に止まり、その真ん中の車から、ご主人さまは登場したのだといふ。

玄関の扉が開いた瞬間に、わたしも含めて、壁際に五人並んでいたメイドさんたちは、一斉に深く頭をさげた。

「ご主人さま、いらっしゃいました」安国寺智恵先生の合図に合わせ、五人で同時に言つ。

頭をさげた姿勢のままのわたしたちの前を、ふたりの影が通り過ぎて行つた。お嬢さまと、冷泉添華さんだ。

「お父さま、よくいらっしゃいましたね」天使さまのお声がする。

「ああ」男性の声。

わたしは自分のからだが、ぶるっと震えるのがわかつた。たつたひとこと『ああ』だけだつたけど、こんなにドスの利いた声を聞くのは初めてだつた。背中を、冷たい汗が流れていく。

さつきとは逆の方向に、三人分の影が通り過ぎて行つたあとで、ようやくわたしの震えは弱まつた。顔をあげたわたしの目に、お台所へ急ぐ鍋島菜花さんの後姿がうつつた。

清水拭乃さんに軽く背中をたたかれて、わたしたちも応接室へと急いだ。初対面のわたしと河野流瑠ちゃんは、『ご主人さまに』挨拶をしないといけないからだ。

「失礼いたします」

一声かけてから、菜花さん以外の四人のメイドさんが室内に入る。応接室のソファーには、向かい合つようにしてお嬢さまと『ご主人さまが座つていた。

このとき、わたしは初めてご主人さまのお顔を見た。

髪の毛はライオンのたてがみのように勇ましく、顔は太陽のよ

にギラギラと光つていて、田つきは研ぎ澄ませられた刃物のように鋭かつた。

ひざが、がくがくと震えるのが、自分でもわかった。

お嬢さまのおそばに立つてゐる添華さんと、わたしの視線が交差して、添華さんが小さくなづいた。それが合図だった。いうことを聞かない足を懸命に動かし、一步前に踏み出して、ご主人さまに「あいさつしようとした、そのとき

「なんやつ。誰や、おまえは！」

ご主人さまの一喝。

耳の奥の鼓膜が、じいんと震えるのが分かつた。わたしに向けられたその視線が、胸の奥の方まで突き刺さつてゐるような感じがして、わたしは動けなくなつた。

「ご主人さまのからだから湧き出るオーラのような何かが、わたしをぐいぐいと押しつぶそうとしているようにも思えた。

わたしは、懸命に口を動かす。自己紹介するべく、声を絞り出そうとする。

ぱくぱくと、震える口が動くだけ。

声が出せない。息が吸えないので、空氣も出でこない。

わたしにとつて、永遠とも思える時間が過ぎようとしたとき、天使さまの優しいお声が聞こえた。

「お父さま、前にお話したはずですよ。新しいメイドさんが入りました、と」

「なんや、ろくに口もきけんやつやないか！　また、ゼンの馬の骨かもわからんようなもんを拾つてきたんかい。イヌやネコとはちやうねんぞー！」

「お父さまの、部下だつた方の娘さんですよ

「ああん？」

「陶さんの娘さん、陶小雪さんです」

「す……え……す、え……。ああ、陶。あの陶かつ」

『あの』といつ言い方が、お父さんによつたる事件のことを、わ

たしに思い出させた。

真っ白な死体を目にしたときのことが、記憶の底の方からじわりと湧きあがつてくる。胸が、ぎゅうっと絞られるような感じがした。強いめまいがする。倒れなによつて、足を踏ん張るのがやつとだつた。

そんなわたしの隣に、すうつという感じで人影が重なつた。

「お初にお目にかかります。河野流瑠と申します。半年前より、こちらでお世話になつております」

「ああ、そうかい、せやけど、そんなもん、どうでもええわ。お前ら、はよ出でけ」

「主人さまが、ハエでも追い払つようにして手を振つている。このときのわたしは、まだ頭の中が真っ白だったが、拭乃さんに抱きかかえられるようにして、からうじて外へと向かつた。なんとか最後の力を振り絞つて、頭をさげる。

「失礼いたします」

「おいこら、またんかい。安国寺だけは、ここに残れ
わたしたちメイド三人を残して、応接室の扉が閉まつた。

清水拭乃さんと、河野流瑠ちゃんに両脇を抱えられるよじりして、わたしさは応接室から離れた廊下の角っこまでやつてきた。まだ固まつているわたしの背中を、拭乃さんが懸命にこすつてくれた。流瑠ちゃんは手をさすつてくれている。

ようやくふつつい呼吸ができるようになつて、わたしは声を絞り出した。

「すみ、ま、せん……。ちゃんと、『あこせつ、できません、でした……』

「氣にすんなつて、あれは向ひが悪いだろ?」

「そん、な……」

「大丈夫だぜ、ここなら声は聞こえないからさ。こきなり怒鳴られりや、どんなやつでもテンパつちまうもんだ」

「で、でも……流瑠ちゃんは、ちゃんと『あこせつしたのに……』」

流瑠ちゃんが、わたしの頭をなでなでしてくれた。「それは順番が逆だつたからだよん。もしわたしが先だつたら、絶対おなじような状態になつてたさね」

しばし、ふたりになでなでさすをもらつてこる間に、台車を押してくる鍋島菜花さんに廊下で出くわした。台車の上に湯気がただよつてこるのは、どうやらお茶の用意がしてあるためらしい。「どうしたの? どうして、ここに居るの?」

「どうせこつもねえぜ。あたしたちやハブられたのさ」

「ハブ? によろこよろの? マングースとかの、ハブ?」

「お邪魔だから、出ていけつて言われたよん。内緒話みたいさね」

「ああ、そういうことね。うとうと、父ひとり娘ひとりですもの、あつといつもお話をありますんじやないかな」

「……菜花つてさ、ときどき妙に神経が太くなるよな

「あら、もうかな?」

おふたりのお話もそこまでだった。とつぜん応接室の扉が勢いよく開いて、中から四人の男女が出てきたからだ。男の人、つまりもちろんご主人さまだけど、振り向いて女性陣三人に何かを言つている。お嬢さまが軽く頭を下げているところをみると、『見送りはない』とか、そんな感じの内容だったのかもしれない。

ご主人さまが、添華さんと智恵先生をしたがえて、傲然とした足取りで、わたしたちの前を通り過ぎ、玄関へと歩いていく。わたしはさつきの感覚を思い出してからだが固くなつたが、からうじて、おじぎだけはちゃんとすることができます。

玄関の方で、『ご主人さまをお出迎えにきたのだろうか、複数の女性の声がしていた。

ちょっとしたやり取りのあとで、玄関の扉があいて、そして閉じた。静寂が戻り、いつもの（といつてもここ三週間ほどだが）お屋敷の空気になるのがわかつた。

玄関に力ギをかけた、添華さんと智恵先生が、わたしたち三人のところに戻つてくる。わたしがドキッとしたのは、お嬢さままでが、こちらにいらしたからだ。

驚いたことに、うつむいているだけのわたしの両手を、お嬢さまは握つてくださった。まるで芸術品のように美しい唇が開かれる。「ごめんなさいね、初対面なのに、あんな風に言われて、驚いてしまつたでしょう」

たしかに、わたしは驚いてしまつた。まさかお嬢さまに、このようなお言葉をいたたくとは思いもしなかつたからだ。

「まあ、あの状況なら、泣き出さなかつただけでも上出来です」

今度は、添華さんの声がした。

智恵先生は黙つて、わたしのことをぎゅうっと抱きしめてくれた。ええと、あの、別の意味で泣き出しそうなのですが。

お嬢さまの視線が、菜花さんが押している、台車の方に向かられた。

「それはお茶でしょうか？」

「はい、間に合いましたが」

「なら、それを応接室までもつてきてくれない？　みんなさんの分の、カツプも用意してくださいます」と
菜花さんが、首をかしげる。「あの、全員分、とにかくでよろしいでしょうか？」

「ええ、お茶でも飲みながら、みなさんと、すこし落ち着いてお話をしましょう」
お嬢さまだ、いつ見てもまぶしい、天使の微笑をうかべた。

お嬢さまとお茶をいただくなんていうのは、初めての経験だった。もちろんわたしはけつこう緊張したけど、さつきまでのよくな、締め付けられるような不快感はなかつた。おなじ大内のおうちの父と娘なのに、このちがいは何なのだらう、とわたしはちょっとぴり考えてしまつた。

そのお嬢さまが、応接室にいる全員を見わたす。

メイド五人、運転手ひとり、秘書ひとり、お嬢さまおひとりの、合計八人になる。そのあとで、冷泉添華さんに向かって、お嬢さまがうなずいてみせた。添華さんがお嬢さまに軽く頭をさげてから、紅唇をひらく。

「みなさん」、集まつていただいたのは、他でもありません。「主 人さまからの指示の、要点をかいづまんでお話しするためです」わたしは、じっと耳をすませて、そのつぎの言葉を待つた。

「一時的にですが、このお屋敷に新たにメイドを入れることになりました。人数はふたりで、明日からしばらくのあいだ、住み込みでここにいていただく形になります」

お嬢さまと安国寺さんは、すでにこの話を聞いていたみたいで、添華さんは、わたしを含めた残るメイドの四人と、丸田輪さんを見てから続けた。

「要旨は以上ですが、なにか質問はありますか？」

清水拭乃さんが、ちらりとわたしたちを見てから、手をあげた。

「そのふたりって、もちろん女性だよな？」

「当然でしょ、ここは男子禁制ですから」添華さんがすぐに返答する。

「このお屋敷にきてからって、なにしてもらひのせ。いちおうつせ、おれたちはちゃんと仕事をしてゐつもりだけど……こや、訊くのがマズかつたら、質問を取り消すぜ」

添華さんが、自分の女主人の様子をつかがつた。それに対しても、お嬢さまが、おおきくうなずくのを見てから、口をひらく。

「きていただいた方には、お嬢さまの、護衛をお願いすることになります」

「護衛？ それは、まさか……」わたしの口には、拭乃さんが、あとにつづく言葉をむりやりに飲み込んだ、よつに見えた。

わたしは思わず部屋を見わたしてしまった。添華さんが『護衛』といった直後に、部屋の空気が急にこおりついた、そんな印象を受けたからだ。

そんな空氣のなか、ひょい、という感じで、河野流瑠ちゃんが手をあげる。

「住み込み、つてことだけど、使つてもらつ部屋とかどうするのん？ 客間つかうのん？ もしくは使用人よつの空き部屋とか、掃除しといた方がよいさか？」

「それは、きていただいてから決めることにします」

その添華さんの答えを聞いて、流瑠ちゃんはかるく顔をしかめた。「さつきから、きて『いただく』つて言つてるけど、来るのはエライひとなん？」

添華さんが、ふたたび自分の主人の様子をつかがい、お嬢さまが、ふたたびうなずきながら微笑をつかべる。添華さんが、わざかに緊張した声で言つた。

「きていただくのは、ふたりとも『賢者のメイド』です」

「……えええええ！ 賢者つて、あの『賢者』かよ」

びっくりした拭乃さんが出した、その大声にわたしほびっくりしてしまつた。胸のドキドキをしずめながら、そつとみんなの様子をうかがつてみる。

はじめて話を聞く五人のうち、驚いているのは拭乃さんと鍋島菜花さんのようだった。

残る流瑠ちゃんと輪さんの様子はどうかといつと よかつた、ハテナマークが頭の中でおどつてこるのは、わたしだけではないみ

たい。

もう一度、ひょい、という感じで、河野流瑠ちゃんが手をあげた。
「『賢者』とか『賢者のメイド』とか、いったい何さか？」
「ハハハ、すぐに自分の考えを言える流瑠ちゃんの元気の良さはすばらしいと思ひし、同時にひやりましいなあ、とも思えるのだつた。

流瑠ちゃんの質問に、なんとも言えない感じで反応したのは、拭乃さんだつた。

「ああ、『賢者』を知らないのかよ。ジョンネレーションギャップ、つてやつを感じるぜ」

「ふきちゃん、しかたないんじやない？　わたしたちだつて、先輩たちからお話を聞いたくらいでしょ？　『活躍されたのは、かつこの昔のことみたいだし』

モップを抱えたまま、半眼になつて眉を軽くしかめている拭乃さんを、菜花さんがおわげを揺らしてなだめていく。

そんなメイドたちの様子を見ていた添華さんが、ハテナマークを頭の上にのせて、わたしたち三人の方を向いた。

「良い機会ですから、『賢者』について簡単に説明する」とこしましょひ。知つておいて、損はないですから

冷泉添華さんが、すこし記憶をむぐるような表情になつた。そういうときの添華さんの視線は冷たく鋭くて、とても大学を卒業したての女性とは思えない雰囲気になる。

「『賢者』というのは、ひとことで言えば、きわめて優秀な探偵です。探偵だった、という表現の方が、適切かもしれません」

河野流瑠ちゃんと、丸田輪さん、わたしの三人は、緊張したおももちで話を聞く。

「今から三十年は、前になるでしょうか。当時は、いわゆる『高度経済成長』が終わって、日本全体が、だいぶ豊かになつていきました。近代史の授業で、習つたかもしませんが

わたしは、こくりとちいさくうなずいた。

「ただ、日本は、あまりにも経済の成長を優先しすぎてしまつた。結果として、公害や、貧富の差、犯罪の増加といった、ゆがみをうむことになつた。けれども、そういうゆがみを直せるほど、社会のシステムは成長していなかつたのです」

すこし難しくなつてきたけど、なんとかわたしは理解できた。

「警察、という社会のシステムも、現在ほどは成熟していなかつたわけですが、そこで、それをおぎなう形で、探偵、あるいは興信所、というものが、重宝されていたようです。その中でも、群を抜いて優秀と言われたのが、『賢者』でした

添華さんが、わたしたち三人をぐるっと見渡した。

「ここまで質問は？」

わたしたちは、そろつてふるふると首を振つた。

「三十年前は、現在ほどには情報技術が発達していませんでした。よつやくテレビが普及し終わったころなので、携帯電話も、インターネットも、もちろん存在しません。情報を集めるという作業が、とても困難だった時代です」

うーん、どんな感じの社会生活だったのか、想像するのが難しい。そんなわたしたちの様子を見こしてか、添華さんは、ゆっくりした調子で話してくれている。

「当時の探偵が、情報を集めるための基本、それはひとでした。つまり、人海戦術です。できるだけ多くの情報を集めるには、できるだけ多くの優秀な人間を動員する。そんな、原始的な方法をもちいる必要があったのです」

この説明は理解がたやすかつたので、わたしはふむふむとうなづいた。

「『賢者』も、かなりの人数を部下にしていたようですが、特徴的なのは、そのほぼ全員がメイドだった、ということです。数十人もおよぶメイドたちを、まるで、自分の手足のように使いこなし、情報を集め、処理し、探偵として活躍していました」

流瑠ちゃんが元気よく手をあげて、許可をもらつてから質問した。「なんで、みんなメイドさんだったん？」『賢者』さんの趣味とか？

そのストレートな表現に、お嬢さまがほほ笑むのが、わたしの視界のすみで見えた。

「趣味という一面もあつたようですが、別の理由もあつたようです」添華さんは、くすりともせずに続けた。「すなわち『賢者』は、主に富裕層を顧客としていました。潜入・偵察・護衛、そういうった要望に応えるのに、メイドであるほうが都合よかつた、とのことです」「ふーん、と流瑠ちゃんが、微妙な反応をした。

「つまり、メイド好きで、お金持ちだけを相手に商売していた探偵さん、ってことさか？ あんまり、すこしそうな感じはしないさね」

今度は、清水拭乃さんが、異議あり、といった感じで手をあげた。「いや、実際はかなりすごかつたらしいぜ。ほら、あたしと菜花はさ、家政婦さんの派遣会社に登録して、仕事を紹介してもらつていだろ？ そこの先輩とかから、ずいぶんいろいろな話を聞かされたよ」

拭乃さんは、オーバーに両手をひろげてみせた。

「『賢者のメイド』っていうのは、例外なく、全員が超一流のメイドなのさ。まあ、細かい話は、はしょるけどさ。なんでも、一時的にでも『賢者のところで働いてた』って履歴書に書くと、メイド的には、普通の社会人にとって、超一流大学を卒業したのと同じくらいの価値がある、って話だつたぜ」

『メイド的』という表現が、ちょっとツボにはまりそうになつた。わたしは、笑うのを我慢していたけど、拭乃さんはいたつてまじめな顔をしている。それを見たあと、わたしもちょっと気になつていたことがあつたので、おそるおそる手をあげてみた。

「あの、さきほどから、昔のお話をされてますけど、いまはどうされてるんですか？」

添華さんがすぐ答える。「現在の『賢者』は、少人数のメイドたちと仕事をしているようです。いまは、情報技術が発達しているので、人海戦術の時代ではないですから。ひとが少ない方が、都合のよいこともあります」

わたしには思いつかないけど、なにが都合よいのかな。

「管理する人数が少ない方が、情報の漏えいが起こりにくいでしょう？」

あ、なるほど。

「説明は、これくらいで良い、と思いますが」添華さんが、お嬢さま以外の全員をながめながら言った。「大切なのは、ご主人さまが『賢者のメイド』を呼んだ、ということです。これは決定事項です。変更はありませんから、失礼のないようにお出迎えしてください」わたしたち六人は、お嬢さまと添華さんに向かって、了解の返事をしたのだった。

「よいよ、次の日の朝になつた。あの『賢者のメイド』さんたちが、やつてくるのだ。なんでも、送迎のための車は、この主人さまの方で手配したらしい。

「完全にVIP待遇さね」

河野流瑠ちゃんが、どこか不満そうにつぶやくのが聞こえた。なんとなく、その気持ちはわたしにもわかる。

護衛といつよくわからない事情で、メイドさんが増えることになつたからだ。わたしは新米メイドだから、それほど気にはならないけど、流瑠ちゃんみたいに半年くらいここで働いていたら、きっと穏やかな日常を乱されたくない気持ちが強いのだろう、と思つた。

そんなことをぼんやりと考えてゐるうち、玄関前に一台の黒塗りの高級車が止まるのが見えた。このお屋敷は「の字の形の建物なので、中庭からでもその様子が見える。

いまはお出むかえのために、お嬢さま以外の全員が中庭にそろつていた。

お掃除は、昨日の夜から念入りにしてあって、準備は万端。あとは心の準備をするだけだから、わたしは深呼吸をして待つっていた。

電動式の、鉄製の門扉がゆるやかに開かれる。

そのあとで、高級車の後部座席のドアが開かれた。

無造作に降りてきた、ひとりの女性。その姿を見て、わたしはびっくりした。

まず、おつきい。女人なのに、背がすごくおつきい。

清水拭乃さんが、百七十センチを超えておつきいのだけど、それと同じか、それ以上におつきい。ポニーテールで髪を結いあげているせいかもしれないけど、それにしたつておつきい。百八セン

チ近いんじゃないのかな、とわたしには思えた。

つぎに、若い。年齢がすごく若い。

『賢者』さんは三十年前の探偵さん、とお話で聞いていたので、てっきりおばさんか、それに近い年齢のひとが来るのでは、とわたしは勝手に思っていたのだけど、ぱっと見は十代の後半、といった感じだった。わたしよりちょっと年上、くらいにしか見えない。

そして、きれいだった。顔もスタイルもすごくきれい。

目はぱっちり、髪はつややか。すごく背が高いし、足も長いし、胸もあたしよりずっと大きい。芸能人とかモデルさんとか言われても、わたしは疑わなかつたにちがいない。メイド服を着ていなければ、わたしはそういう仕事のひとだ、と思つただろう。

最後は、そのメイド服だ。すごく古風な感じのメイド服。

夏なのに、上着の袖も、スカートの裾も長い。特に裾は足首くらいままである。こういう伝統的な感じのメイド服は、以前に、昔のヨーロッパを舞台にした、海外ドラマか映画で見たことがあった。極力、肌というものを露出させないように作りになつてている代物だ。ひとめ見ただけで、ただものではないのがわかつた。どうやら噂通り、『賢者のメイド』さんは並外れているらしい。

正直、その外見だけで、すっかりわたしは圧倒されかかっていた。そしてそのひとが、わたしたちがいる中庭の方に、右手でトランクをじろじろと引きながら、驚くほど軽やかな歩調で近づいてくると立ち止まり、口を開いて

「やつほー、おはヨーグルト！」

中庭の空気が、一瞬にして固まつたような気がした。

「ありー、みんなどーしたのかなー。元気ないよー。元気ないさつは基本だよー。よし、もう一回ー やつほー、おはヨーグルト！ あたしはビー、よろしくね！」

もちろん、誰も返事しない。固まつたままだ。

「あ、もしかして、いたいけなおねーさんの魅力に、もうメロメロなのかな、ね？」

そのビーさんはけらけらと笑つと、あいている方の左手を、ひらひらと振つてゐる。

軽い。どこまでも軽い。声も軽いし、笑顔も軽いし、拳動も軽い。ふわふわしてて、いまにもどこかへ飛んでいきそうだ。

「しきにいる冷泉添華さんは、何も言わない。何も言わないのが、逆にすこしこわい。

誰も何も言ないので、しかたなしに、といつ感じで清水拭乃さんが訊く。

「……なあ、確認したいんだけど、あんた本当に『賢者のメイド』か?」

「えー、どついう意味かなー」

「はつきり言つたどよ、とてもそつは思えないんだけどな」

「ちょっと、ふきちゃん

「とめるなよ、菜花。お嬢さまの迷惑になりそうな人間は、この屋敷にはいらねえぜ」

拭乃さんが、鋭い視線をビーさんに向けた。わたしは知つてゐるけど、怒つててゐるときの拭乃さんの表情は、かなりの迫力がある。あるのだけど、ビーさんは、まったく意に介した様子がなかつた。「えー、それはそうだよ。だって、もしも二セモノだつたら、この敷地内に簡単に入つてこれないと思つけどなー」

「…………」

「それにおねーさんは、そっちの方で準備した車でここまで來てるわけだし、ね? そーいうことを考えれば、おねーさんの身分を疑うのはちょっとありえないかなー」

ビーさんは、どこまでも軽やかに応じてみせる。そんなビーさんを、拭乃さんが噛みつく寸前の表情で見つめていた。

「ヒーリー、もうひとつはゼリーね？ 姿が見えないよん」
 河野流瑠ちゃんが、元気な声で訊いた。ケンアクになりかかつて
 いた空氣を、振り払おうとしてくれたのかもしない。たぶん、話
 題が変わつて喜んでいたのはわたしだけではない、と思う。安国寺
 智恵先生が聞鬱いれず、流瑠ちゃんが作った流れに乗つたからだ。
 「そうそう、そうですわ。たしか、いらっしゃるのはおふたりだ、
 と聞いておりましたの」

「え？ ああ、ふたり田ね。うーんと、わっせからこじこじるんだ
 けど」

「ですけど、あなたひとりしか姿が見えませんわ」

「うーん、しかたないなー。ほらっ、出ておいで、ね？」

ビーさんが、誰に向かつて言つたのかわからなかつたけど、答え
 はすぐにわかつた。

「あっ」

わたしは思わず、声をあげてしまつた。

ビーさんの背後から、何かが一瞬だけ顔をのぞかせたからだ。
 わたしが出してしまつた声を合図に、みんながビーさんに注目す
 る。そしてもう一度。ビーさんの背中から、また、顔をのぞかせた
 ものがある。今度は、すこしゆっくりだったので、わたしにもその
 正体が分かつた。

田があつて、口があつて、髪の毛があつた。それは、まちがいな
 く人間の顔であつて、どうやら、ビーさんの後ろにひとり隠れてい
 るらしい。

……あれ？ 隠れる？

「じめんねー、この子、人見知りするんだ。ほら、じあこさつしな
 いとダメだよ、ね？」

ビーさんが能天氣な（失礼な表現だけど、実際にビーさんの声は

そうとしか聞こえない）口調でさつぱつと、自分の背後にある人物を、左手でひょいとつかんだ。そして、まるで手荷物でも動かすようにして、自分の左となりに移動させてしまつ。

その姿を見て、わたしはまたもやびっくりした。

まず、ちっちゃい。からだがすくなくちっちゃい。

どのくらいちっちゃいのかといつて、わたしの身長が百四十センチくらいなんだけど、そのわたしよりも、さらにひとまわりちっちやいのだ。だから、ふたり田の人物の身長は百三十センチといどなんじやないか、と感じられた。

つぎに、若い。お屋敷で最年少であるわたしより、年下としか思えない。

ぱつと見た田は、小学校の二、四年生くらい。年齢にして、十歳かそこらなんじやないか、と思える。さつきまで、ビーさんが若いのに驚いていたけど、そんな比じやがない。若いといつが、おさない感じしかしない。

そして、かわいい。顔もスタイルもすくなかわいい。

丸っこい小さな顔に、細いからだ、ちっちゃい手足。まるでお人形さんみたいだった。それに田がとても特徴的で、田のうわまぶたが、半分くらいまで落ちかかっている。一見すると眠たそうにも見えるから、もう少しでおねんねしそうな小動物、のよつた雰囲気をかもしだしていた。

お洋服は、ビーさんと同じデザインだった。やつぱり古風な感じのするメイド服。

それで、ああ、この子がふたり田の『賢者のメイド』なんだね、と分かったけど、受けた衝撃はまったくおさまらなかつた。

「……（ペコリ）」

そのちっちやいふたり田のメイドさんが、ちよこんと頭をさげた。そのあとに何もないところをみると、どうやらそれが「あいさつだつたらしこ。

さつぱーさんが、おとぼけないあこやつをしたとおとほ別の意

味で、中庭の空気が、なんとも言えない感じで固まつた、よつな氣がした。

だれが最初に何を訊くのか、わたしはちよつとビデオをしながら待つていた。

口火をきつたのは河野流瑠ちゃんだったけど、きつと、わたしと同じ想像をしたのだと思つ。たまりかねた感じで、その口を開いた。「あのさあ、いくらなんでもマズくないのん？ それとも、何かの

冗談さか？」

「ほえ？ なにが？」

「いや、だつて……その子、小学生さね？」

「え？ ちがうよ」

「ちがう、つて……まさか、幼稚園児とかじやないさね？」

「いやいや、まつせかー。この子はエイチティーつていうんだけど、ここにいる最年少の子とおないどし、つておねーさんは聞いてるよ」そう言つたビーさんの視線がぐるつと動いて、そこにいるみんなを見渡してから、最後にわたしの方に向けられて止まつた。わたしはまたもや声をあげてしまつた。

「えと……この子、いや……エイチ、ティー、さん、は、わたしと
同じ年なんですか？」

「うん、たしかその通りかなー。エイチティーは中学一年生だから」「これで三回目になると思うけど、中庭の空気が固まつた。

「じゃ、自己紹介はおーしまい、と。お仕事の話をしよーかなー」

何事もなかつたかのように、ビーさんが言つへ。

「ちよつと待つてもらいたいわね」

それまで沈黙を保つて、この状況をながめていた冷泉添華さんが、ゆつくりと、だけど断固とした口調で言つた。

冷泉添華さんが、つかつかと歩いてくる。清水拭乃さんと河野流瑠ちゃんが、暗黙の了解のうちにすばやく場所をゆずり、添華さんは、ふたりの不思議なメイドさんの前に立ちはだかった。

「まずははじめに、あなたたちのお名前を確認しておきましょ。うちらの背の高いあなたがビー、そして背の低い方がエイチティーですね」

「うん、そうだよー」

「アルファベットと考えて構わない?」

「そうだねー。わたしがABCのBで、Jの子はHとTでHTだね」「それで通すつもりですか?」

「うん? どうこいつ意味かな?」

「本名を名乗る気はない、と?」

「本名なんて仕事に必要ないんじゃないかなー。いつもこの名前で通してるし、ね?」

「でも、ふだんは本名で呼び合っているわけでしょう?」

「うんにゃ、ちがうよ。おねーさんだって、HTの本名なんて知らないしー」

「.....」

「それでいままで、なにも支障はなかつたけどなー」

添華さんが、苦虫をかみつぶしたような顔になつてこる。クールでポーカーフェイスな添華さんにしては、ものすごくめずらしこじだ。

「じゃあ、HTさんにもお詫びするけど」

添華さんがそう言つた瞬間、HTさんが、すっとBさんのつじろに隠れた。

Bさんが「大丈夫、大丈夫だから、ね?」とか言いながら、左手でHTさんをひょいとつかんで、もうこつかい、自分の左となりに

移動させた。

「一人、メイドさんとして、人見知りするのは、どうなんだろ？わたしの心の声が聞こえたわけでもないだろ？けど、添華さんは、さつきより優しい口調で説いた。

「H-Tさんにもお話をねばじ、いまのBさんのお話にまちがいはない？」

「……（ペコ）」

またもや無言のうちに頭をさげて、それでおしまい。

Bさんはあいかわらずにここと笑っているし、H-Tさんは眠そうな目で、じつとこちらの様子をうかがっている。そして、添華さんはなんともいえない表情のまま、困惑していくようだつた。そして、ここからどうしたものだろ？ わたしはこちばんのトツ端なので特になにかができるわけではないのだけど。

そこに、拭乃さんが、すうっとこう感じで、添華さんに近づいていた。なぜやくよくな会話が、わたしの耳まで届いてくる。

「添華さん、アルファベットの記号で呼ばれてる、ってことは、あいつらマジもんですよ」

「どうこのこと？ 清水さんの方が、『賢者のメイド』については詳しそうね」

「『賢者のメイド』は見習この期間が終わって、正式なメイドとして認められると、記号で呼ばれるようになる、そういう話を聞いたことがあるんですよ。なんでも、犯罪者に狙われたりしないように、本名はメイド同士でも知らないようになつてる、って噂ですぜ」

「といつことは、あの若さで、『賢者』が認めた正規のメイドだ、とこつことなの？」

「信じがたい話ですが、あのふたりが一セモノでなければ、そうですぜ」

「こつらで手配した車に乗つてきている以上、一セモノといふことはあり得ないわ。もちろん、これから『賢者の館』に連絡して、確認はするつもりですけどね」

そう言つて、添華さんはちこさく髪をかきあげた。

「まあ、どちらにしろ、『主人さまが』判断されるでしょう。もつ、こちらに向かわれている、とのことでしたから」

わたしのからだの中で、心臓がおつきジャングルした。

「あ、あの……』主人さま、また、その……お見えになるんですか？」

情けないことだけ、自分でも、ちょっと泣きそうな顔になつているのが分かつた。

そんなわたしを見て、添華さんがわざかに表情をゆるめて言つた。
「『主人さまは、たしかにもうすぐいらっしゃいます。ですが、今回は自己紹介の必要はありません。他のひとたちと一緒に、壁際にひかえていればそれで構わないです」

その直後、おだやかだった表情が、一気に厳しくなつた。

「BさんとHさんも、中にお入りください。お嬢さまのお父君である当家の『主人さまが、おふたりに面会するためにこちらへ向かっております」

「へー、準備いーねー。ところで『さん』とか要らないから、呼び捨てでいいよ、ね？」

おつきなBさんが、けらけらと笑うと、トランクを引き、長い脚を交互にうごかして、大股に歩きはじめた。そのあとを、ちつちつなHさんがついてくる。

それを見たみんなの間から、自然とどよめきが漏れた。

Hさんの歩き方だけど、どこかよたよたとしていて、左右に揺れながら、ちまちまと歩いている。はつきり言おう。ペンギンの歩き方にそっくりだ。すごくかわいい。

思わずゆるみかけていたわたしのほおは、厳しさをいまだ残している添華さんの視線とぶつかって、あわてて引き締められた。忘れてはいけないが、このあと、あの『主人さまが、またやって来る、いや、いらっしゃる、のだ。

このおふたりはどうなつてしまふのだろう、と思いつつも、あつ

とやんなことを考える余裕はすぐなくなるだらけ、と思つて、わたしの胸はキョツとなつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9657z/>

BHT ~隻眼の天使~

2012年1月13日23時46分発行